桜町病院
さくら
第17号
発行：平成28年５月10日
広報委員会

〒184-8511 東京都小金井市桜町 1-2-20 ／ TEL042-383-4111 ㈹　http:// www.sakuramachi-hp.or.jp/

基本理念　私たちはキリストのように人を愛し　病める人、苦しむ人　もっとも弱い人に奉仕します

基本方針

1．地域医療機関と強い連携を保ち、地域に根ざした信頼される病院運営をめざします。
2．全人的（身体的、精神的、社会的、霊的）ケアを行います。
3．全職員のよいチームワークによる患者さん中心の医療を行います。
4．常に自己研鑽に努め、質の高い、安全･安心な医療を提供します。
5．患者さんの訴えに誠心誠意耳を傾けます。

桜町病院地域連携の現状

病院長　小林　宗光

はじめに

疾病を抱えていても、老いて認知症があっても日常生活圏域の中で医療サービスや介護サービスを利用して住み慣れた地域で安心して暮らせるようにする社会の仕組みを地域包括ケアシステムといい、高齢化率が急速に進んでいる日本ではその構築が急がれています。在宅ではその方の必要度に合わせて多職種のスタッフが支援をする。かかりつけ医、訪問診療の医師、歯科医師、訪問看護ステーション、調剤薬局（服薬支援の薬剤師）、地域包括支援センター（ケアマネジャー）、高齢者在宅支援センター（デイサービス、入浴、配食サービス）、福祉用具の業者など多くの専門職が関わります。また自宅での介護が困難になったら高齢者福祉施設へ入所、あるいはショートステイを利用、病状が悪化したら病院に入院しての治療、そして病状が安定したら再び在宅にもどる。地域包括ケアではこの一連の支援が切れ目なく行われる必要があるため多職種間の緊密な連携が欠かせません。桜町病院の連携の取り組みをご紹介します。

病院から在宅へ。

退院調整看護師（師長）が昨年９月から活動を開始しました。退院調整看護師は地域医療連携室のケースワーカーと協同し、退院後に患者さんが安心して地域での生活に移行できるように、患者自身や家族の意向（どう生きたい、どうありたい、どこで看たい）を尊重し、退院後の生活を考えた支援体制を作ることで自宅復帰を支援します。先日ある退院が近いご高齢の患者さんの退院調整会議に立ち会う機会がありました。メンバーはご家族、訪問看護ステーションの看護師、地域包括支援センターのケアマネジャー、病院からは担当の看護師、薬剤師、理学療法士、栄養士、医療連携室のケースワーカー、退院調整看護師と多職種のスタッフが参加して患者さんの食事の形状・口腔ケア・使用する車椅子の検討・介護用ベッド・痰を取る吸引器・座位の保持の仕方・ベッドから車いすへの移動の仕方・入浴法・食事の宅配・デイサービスなどさまざまなことが話し合われていました。ケースによっては、かかりつけ医や訪問診療の医師、訪問薬剤師が参加される場合もあるでしょう。

在宅診療を実施している診療所との連携

昨年、「事例検討会」を行いましたがまだ開始したばかりです。事例検討を通して、問題点や成功事例の情報を共有し、連携の質の向上とスタッフ間の顔の見える関係を構築、また在宅診療所を支援できる体制も整えていきたいと考えています。

当院の在宅医療については今年の４月からホスピスの在宅診療を再開しました。患者さんの病状によっては訪問診療医や調剤薬局の緩和ケア専門薬剤師との連携が必要になると考え各事業所のスタッフとも打ち合わせを行ったところです。

認知症の診療

桜町病院は小金井市認知症連携会議に発足当初から参加して活動してきました。認知症の人が状態に応じて適切な医療・介護・生活支援等の支援を受けることができるように認知症疾患の診療体制を５月から強化しました。

認知症疾患の外来は以前から精神・神経科外来で対応しておりましたが、それに加えて「物忘れ外来」を新設し、対応できる診察枠数を増やしました。かかりつけ医やサポート医からのご紹介で、ご本人や家族からの診察予約を受付ます。地域医療連携室の精神保健福祉士（専従）が診察の予約や地域包括支援センター等との連絡調整、専門医療に係る情報提供、退院時の調整、医療相談などを行います。診察の流れを書いてみます。問診や医師による診察の後、脳のMRI検査や臨床心理士による各種神経心理検査を行い鑑別診断を致します。治療計画を立てるためには医学的診断だけでなく、日常生活の状況や他の身体疾患等の状況も踏まえ、本人の身体的、心理的、社会的側面を総合的に評価します。そして治療方針を説明、必要な支援体制の説明や介護保険の申請を行い、結果をかかりつけ医やサポート医に逆紹介し、ケアマネージャー、地域包括支援センター、居宅介護支援事業所などと連携して必要な支援を行います。

認知症疾患の鑑別診断に必要なMRIを新機種（1.5テスラ）に更新する予定で、MRI画像を利用して海馬傍回の容積の萎縮度を正常脳と比較して数値で示すVSRADの評価が可能になり、早期アルツハイマー型認知症の診断に寄与するものと期待します。新しいMRIが軌道に乗りましたら地域の先生方からのMRI

検査（VSRADを含む）のみのご依頼も受けるようにしたいと考えています。そして認知症の方が身体合併症や行動・心理症状で急性期入院治療が必要になった場合の病床を確保するため、市内外の６つの病院と連携の協定書を交わしました。

ヨハネ会高齢部門、その他の連携

聖ヨハネホーム、地域包括支援センター、小金井訪問看護ステーションとは従来から地域医療連携室を通して緊密に連携がとれており、聖ヨハネホームでは看取りにも協力しています。ヨハネ会高齢部門は特別養護老人ホーム、高齢者在宅支援センター、地域包括支援センターを運営しており、施設入所、ショートスティ、デイサービス、入浴や配食のサービス、認知症高齢者の家族会や介護予防を目的としたサークル活動など多くの事業を展開しています。病院が認知症の診療を強化していく中、いろいろなレベルで連携の機会が生じてくると思われます。

市民の方々と直接的な連携ではありませんが、定期的に市民講座を開催し、小金井市が企画した介護予防事業の「さくら体操」へ理学療法士を派遣しています。

これからも医療職、介護職、行政も含めた多職種の方々と更に緊密な連携を計りながら地域包括ケアシステムの構築に寄与したいと思います。

超高齢化社会と地域医療の方向性

小金井市医師会長　斎藤　寛和

小金井市医師会長の齋藤です。桜町病院の皆様には日頃より医師会員との医療連携に心を砕いていただき､厚く御礼申し上げます。

日本の少子高齢化は他国に類を見ないスピードで進行しています。戦後日本の発展を支えてきた団塊の世代がすべて後期高齢者となる2025年には高齢化率（全人口に占める65歳以上人口の割合）は30％に達すると言われており、国民の生活に様々な支障が出る事が予想されています（いわゆる“2025年問題”）。高齢者人口の増加は死亡件数の増加を引き起こします。現在年間約100万人の年間死亡者数は、ピークの2040年には170万人近くに増加すると予想されており、『多死時代』を迎えます。病院で死ねない時代が来ると言われるゆえんです。

高齢化が進めば認知症高齢者数も増えていきます。2012（平成24）年で462 万人と言われた認知症高齢者が2025（平成37）年には約700 万人、65歳以上の高齢者の約５人に１人に達すると見込まれています。最近では、認知症の人の意思が尊重され、“できる限り住み慣れた地域のよい環境で自分らしく暮らし続けることができる社会の実現”が叫ばれています。しかし、BPSDに悩む家族を中心とした介護者の負担増は深刻で、地域での包括的ケア体制の整備が求められています。（注）BPSD（行動・心理症状）:「認知症の中核症状により生活上の困難にうまく適応できない場合に、本人の性格、環境、身体状況が加わって起こる症状）

高齢化社会に伴うこのような危機を乗り越えるために、「住まい・医療･介護･予防･生活支援」の５本の柱からなる”地域包括ケアシステム”の構築が提唱されています（図）。このシステムを構築する上で、

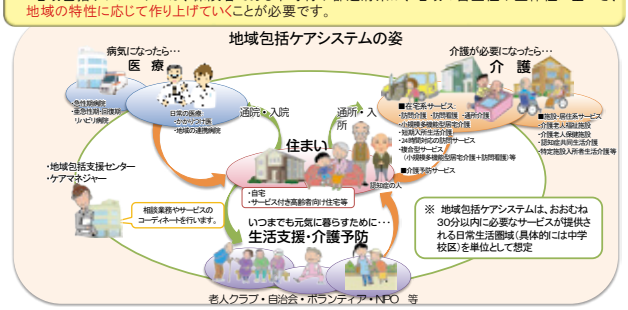
地域包括ケアシステム

○ 団塊の世代が75歳以上となる2025年を目途に、重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、住まい･医療･介護･予防･生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築を実現していきます。

○ 今後、認知症高齢者の増加が見込まれることから、認知症高齢者の地域での生活を支えるためにも、地域包括ケアシステムの構築が重要です。

○ 人口が横ばいで75歳以上人口が急増する大都市部、75歳以上人口の増加は緩やかだが人口は減少する町村部等、高齢化の進展状況には大きな地域差が生じています。

地域包括ケアシステムは、保険者である市町村や都道府県が、地域の自主性や主体性に基づき、地域の特性に応じて作り上げていくことが必要です。



地域医療には大きな変革が求められています。そのひとつは“かかりつけ医による在宅医療”です。急性期医療に偏った病床数を慢性期やリハビリテーションの病床に振り分ける地域医療構想が検討されていますが、激増する高齢患者さんをすべて病院に収容して看ることは困難です。また、患者さんのニーズも多様化しており、住み慣れた地域・住まいで療養し最期を迎えたいという方も増えています。このような要望に応えるのが在宅医療です。小金井市医師会では現在20の診療所が在宅医療を行っています。しかし、多くの診療所の患者数は10人以内で、来たるべき在宅医療の需要増に応えられるものではありません。多くの会員が多くの患者さんに、なるべく少ない負担で在宅医療を提供出来る体制を整えなくてはなりません。

在宅医療は医師だけではできません。従来の外来診療や随時の往診だけの医療とは大きく異なるところです。訪問看護ステーション、介護事業者、ケアマネージャー、理学療法士、福祉用具店、地域包括支援センターさらに歯科医師、薬剤師など様々な職種の方々との連携が必要になります。多くの職種の方々と顔の見える連携、一説には”腹の見える連携”を構築していかないとスムーズな在宅医療は行えません。連携体制の構築は我々医師の労力を節約し、質の高い在宅医療の提供につながり、最終的には患者さんのためになると考えています。そのために医師会では多職種が参加する勉強会やICTによるスマホやタブレット端末を用いた連携システムを導入しています。このシステムは近い将来に遠隔医療システムへの発展も期待されています。

在宅医療においては病院の果たす役割も重要です。病院との連携無くして在宅医療は不可能である、と言っても過言ではありません。病状悪化や肺炎などの重篤な合併症を発症したときには入院治療をお願いする病院が必要です。入院医療を担当する病院には在宅療養への復帰を目指した退院調整をお願いしたいと思います。退院前には退院調整会議を設けていただき、在宅の主治医も参加する事が望ましいと考えています。在宅主治医が決まっていない患者さんについては、市と協力して在宅療養の主治医を決めるシステム（仮称：在宅医療・介護連携室）を設置して、より緊密な連携体制を整えていく予定ですのでよろしくお願いいたします。

もう一つの大きな課題は”認知症対策”です。小金井市では武蔵野市・三鷹市にならって「物忘れ相談シート」を導入しています。このシートは患者さ

んの認知症に関する情報が簡潔に整理されたもので、病診連携や医療・介護の連携をスムーズにしてくれます。認知症初期集中支援チームも活動を開始しました。これは医療・介護の複数の専門職が認知症疑いや認知症の人及びその家族を訪問し、必要な医療や介護の導入・調整や、家族支援などを行うチームです。ここでも要となるのは“多職種連携”ということになります。昨年度までは地域拠点型認知症疾患医療センターである杏林大学の協力のもと運営してきましたが、今年度には桜町病院が小金井市の認知症疾患医療センターに指定される予定であり、小金井市の認知症ケアにおいて中心的役割を担っていただけるものと期待しています。

まだまだ課題は山積みですが、桜町病院のますますの発展をお祈りさせていただきこのへんで筆を置かせていただきます。これからも地域包括ケアシステム構築へ向けて緊密な連携をよろしくお願いいたします。

職場紹介　さくらまち保育所

保育所主任　山田秋希世

桜町病院に所属する子育てしながら働く職員が安心して働くことができるように、当院では昭和49年に院内保育所「さくらまち保育所」を設置して以来、これまで多くのお子さんをお預かりしてきました。平成25年に竣工した、聖ヨハネ会本館一階に保育所は移動し、安全で明るく広々とした保育室になり、快適な保育環境です。また、園庭にも恵まれており、夏場はプールも楽しんでいます。

さくらまち保育所は「元気で明るい子どもの育成を図る」こと目標に健康で安全、そして楽しく過ごすことを主眼に保育を行っています。定員人数19名という小規模な保育所で、産休明け（生後８週間）から５歳児（就学前）までのお子さんをお預かりしており、一人ひとりの子どもとじっくり関わりを持つことができる、とても家庭的な保育所です。人数に余裕のある時には聖ヨハネ関連施設の職員の方も利用しています。お子さんの急な体調の変化があった場合など、保護者の方や小児科との連携も取りやすいので、安心してお預けいただいております。通常保育のほか、幼稚園などの長期休暇中、日曜・祭日や夜間の24時間保育も保護者の方の勤務に合わせて対応しています。

保育室には移動間仕切りを設置しており、午睡室として使用したり、人数の多い時には成長段階に合わせて部屋を分けての活動が可能となっています。雨天時や行事の時等広い空間として使用することもでき、保育の広がりを感じています。また、広い芝生の園庭では朝や夕方の時間帯も園庭を使用することにより、安心・安全に外で過ごせるようになり、子ども達の活動も広がりました。

保護者参加の行事は、遠足・クリスマス会・卒園式の３回あり、その他の四季折々の行事などは子供の成長に合わせて工夫を凝らした保育をしています。

異年齢の子供たちが一緒に生活することで、助け合いの気持ちが芽生え、模倣から色々な遊びを発展させたり、ルールや我慢することを知り、意欲や目標を持てるというメリットを生かすことができます。さくらまち保育所でも、この異年齢保育を取り入れています。相互に刺激を与えながら兄弟のような関係の中で『優しさ』や『思いやり』そして生活習慣を身に付けて欲しいと願っています。

これからも、職員の皆様が安心してお子様を預けることができ、働きやすい環境を作るお手伝いが出来るよう、職員一同力を合わせて頑張っていきます。

●はじめまして●　よろしくお願いいたします。

看護部長着任にあたり

看護部長　田中久美子

４月１日付けで大好きな桜を施設名にしている桜町病院に着任いたしました。桜は幼少の頃に家族で毎年行っていた「お花見」を思い出しながら出勤し、ほぼ満開の桜の木々に迎えられ感激しました。新しい仲間との出会いに感謝し、心を新たにして与えられた役割を楽しみながら精一杯取り組んでいきたいと思っています。仲間の経験知と実践力を借りながら、いつも笑顔で互いの立場を尊重し、自由に意見交換できる環境作りを大切に風通しのよい、そして強固なチーム作りに努めていきたいと思っています。（看護部長室のドアはいつもOPENです。お気軽にお立ち寄りください。）これからも引き続き看護部をよろしくお願い致します。

“4月から、お薬手帳を持って行った方が安くなるってホント?”

薬剤科部長　池淵　剛

実は、ホント！

平成28年４月から、薬局に「お薬手帳」を持って行った方が、薬局での料金が３割負担で40円ほど安くなる場合があります。ただし、原則として、６ヶ月以内に同じ薬局を利用し、その際にお薬手帳を持って行った場合となります。これは、自分の『かかりつけ薬局』を決め、お薬を一元的に管理してもらうことに協力することに対し、少しだけ負担を軽減するというものです。

薬局によっては、必ずしもこの限りではありません。料金については、それぞれの調剤薬局にお問い合わせください。

まだ、お薬手帳をお持ちでないあなた、これを機会に、お薬手帳を持ってみませんか。

トピックス

聖ヨハネ会合同入職式

桜が満開の４月１日、本館戸塚ホールにおいて医療部門、障害部門、高齢部門の聖ヨハネ会合同入職式が執り行われました。式では最初に理事長から社会の変化に沿ったヨハネ会事業の展開のお話や聖ヨハネ会の理念を胸に部門間の連携の下に業務にあたっていただきたいというお話を賜りました。その後、桜町病院長始め各部門長からの歓迎のごあいさつをいただきました。新入職員はやや緊張した様子も見られましたが、新たな旅立ちへの意気込みを感じるすがすがしい式となりました。

人間ドックのご案内

人間ドックを受診してみませんか。

当院では「日帰りドック」と「１泊入院ドック」を行っています。

日本が長寿国であることはご存知のとおりですが、健康で長寿であることが大事です。ご自分の今の健康状態を知り、もし問題があれば、できるだけ早期に解決していくことが大切です。人間ドックでは、詳しい検査を多項目にわたり行い、がん、心疾患、脳血管疾患、糖尿病、高血圧、脂質異常等の早期発見に効果があります。桜町病院の人間ドックではそのお手伝いをさせていただきます。定期的に人間ドックを受診されることをお勧めします。当院の人間ドックは全ての検査をワンフロアで実施でき、各分野の専門家が異常の有無を詳しくチェックします。

ご自身の健康維持のために、人間ドックの受診をご検討ください。受診ご希望の方はどうぞお気軽に当院医事課ドック担当者にご相談ください。電話でのご予約は次のとおりお受けしています。

＜予約電話受付＞　042-383-4111

月曜日～金曜日　13：00～16：00

院内研究発表会

毎年３月の第２土曜日に院内研究発表会を開催しています。今年も、３月12日（土）の午後、会議室に大勢の参加を得て開催されました。今年は栄養科・褥瘡対策チーム、診療情報管理室、リハビリテーション科、外来、療養病棟、地域医療連携室からの６題の研究発表と南３階病棟の事例検討発表、医療安全管理委員会とQC活動推進委員会からの活動発表が行われました。審査の結果、院内研究発表の最優秀賞には療養病棟の「療養病棟に入院中の患者家族のコミュニケーションとしての情報交換ノートの活用」（研究メンバー：今井由香里、砂川美帆、浅井貴子、山本ことは）が、優秀賞にはリハビリテーション科の「嚥下造影検査（VF）からみる経口摂取の可否」が選ばれました。

オカリナ同好会貫井北センター祭りに参加

去る３月27日、第２回貫井北センターまつり（小金井市公民館の分館の一つ）が開催されました。桜町病院オカリナ同好会では昨年に引き続き、同まつりに参加し、約45分間の演奏会を致しました。参加メンバーは医師２名、看護師３名、薬剤師３名で、演奏曲はエーデルワイス、浜辺の歌、旅愁、君をのせて、川の流れのように、時代、至福の海（オカリナソロ）、アメージング・グレース、涙そうそう、見上げてごらん夜の星を、花は咲く（参加者の方たちと一緒に歌う）、そしてアンコールに大きな古時計、の計12曲でした。演奏の後、多くの方たちから音がとてもきれいだったとお褒めの言葉を頂戴し、また来年に向けて決意を新たにしています。

写真は左から、内科村田、ホスピス科三枝、看護部近藤・黒﨑・桝、薬剤科石井・橋本・小西

編集後記

今年は例年になく長い間桜を楽しむことができましたが、季節は移り、新緑が目にやさしい季節となりました。新しく社会人となられた皆さん、職場を変わられた皆さん、新しい環境には慣れましたでしょうか。それぞれの目標に向かって着実な一歩を進めていきましょう。（周）